

多文化社会オーストラリアにおける エスニック・ツーリズム形成過程に関する研究

指導教授: 徳久 球雄

国際学研究科 国際関係専攻

朝水 宗彦

論文要旨

1. 研究の目的と概要

本論は「多文化社会オーストラリアにおけるエスニック・ツーリズム形成過程に関する研究」というテーマで、オーストラリアにおける社会構造の変化をふまえながら、同国における観光形態やその政策の変遷を歴史的に辿った。時代的には、白豪主義が衰退し、多文化社会が形成されていく第二次世界大戦後からエスニック・ツーリズムが飛躍的に発展したキーティング政権までの半世紀を中心として、通史的に述べた。ただし、事例研究の中心となるのは多文化主義が大衆的に定着し、なおかつ観光が国家的な基幹産業となった 1990 年代である。論文タイトルに挙げたように、本論では「エスニック」と「ツーリズム」に研究対象が関わってくる。そのため、エスニック政策と観光政策の両面から調査し、エスニック・ツーリズムという形での両者の結びつきを考察した。

オーストラリア連邦政府が観光政策に力を入れるようになったのは 1972 年の観光・レクリエーション省設立以降であるが、四半世紀後、観光は国の基幹産業になるまで成長した。この大きな変化のため、同国における観光の変遷は観光政策を研究するうえで 1 つの興味深いケースである。なお、本論では主に 2 つの事柄について研究した。1 つはオーストラリア観光の独自性を明らかにすること、もう 1 つはエスニック・ツーリズムがもたらすプラスの面を追求することである。

第 1 の独自性追求の点ではオーストラリアの地理的な特徴を十分考慮に入れる必要がある。つまり、オーストラリア理解のためには「距離の暴虐」(The Tyranny of Distance) と呼ばれる空間的な隔離性を克服するという建国以来の基本的な政治目標を視点に入れなければならない。距離の克服に伴う「脱欧化」あるいは「アジア・太平洋化」はオーストラリア外交の基本政策であるが、そ

の影響はエスニック政策や観光政策などを含めた多くの政策で顕著に見られる。近隣のアジア諸国を意識した多文化政策の実践や、日本をターゲットとした連邦政府主導の観光キャンペーンはその一例といえる。

なお、本論では、修士論文「多文化社会オーストラリアにおける食文化の変容」で用いた移民社会における渡来文化の普及プロセスの研究をベースにし、エスニック・ツーリズムに関わる現象を分析する上で応用した。本論に至る研究では、エスニック文化の平和的共有という点を強調してきたが、マイノリティ文化のみならず、ホスト社会側の文化受容プロセスにも着目していることが前研究から引き継いだオリジナリティとして挙げられる。多民族国家での民族対立を予防するためにオーストラリアは多文化主義を選択したが、この普及には移民に伴う文化の多様化という外的要因のみならず、産業構造の変化などといったホスト社会側の内的要因も見られる。

さらに、博士論文で研究した新たな展開として、アボリジニの伝統文化が環境に優しい形態の観光を運営する上で重要な役割を演じていることに注目した。本論で述べたアボリジナル・ツーリズムに関する諸事例に見られるように、オーストラリアにおける観光形態では異文化間の共生のみならず、自然と人間とのより良い関係も示唆している。1980年代に行われた大規模なリゾート開発のように、かつて同国の観光は、自然破壊を伴う場合があった。しかし、90年代における同国の観光はコンサベーション型に様変わりし、その運営には自然のなかで培われてきたアボリジニの知恵が生かされている。

次に、第2のプラス面を探求する点であるが、エスニック・ツーリズムの利点は社会・経済面で少なからず挙げられる。たとえば、オーストラリア観光にエスニック・ツーリズムというメニューを書き加えることは、同国の基幹産業である観光の選択肢を増やし、幅広い客層をターゲットにする可能性が高まる。つまり、選択肢の増加ということは、一時的なブームによって観光客数が変動する同国のインバウンド観光のリスクを分散することになり、より安定した外貨収入を期待できる。さらに、オーストラリアのインバウンド観光はリピーターが少ないという弱点があるが、観光メニューの追加はこの弱点の克服につながりうる。

さらに、本論ではエスニック・ツーリズムに関して、エスニック文化の平和的共有という点を強調した。旧ユーゴスラビアや旧ザイール、アフガニスタンなどで見られるように、いくつかの多民族社会では民族間の諸問題が絶えない。そこで、多民族国家での民族対立を予防するためにオーストラリアが選択したのが先述の多文化主義であり、それを具体化した多文化政策であった。ただし、多文化主義は多様な諸民族の文化を尊重するものであり、多文化社会の形成には社会を構成する諸民族の相互理解が必須の条件である。

異文化間の相互理解のためには、異文化交流が初歩的な段階として重要である。エスニック・ツーリズムは異文化間の接触を活発にするものであり、接触がプラスに働けば民族間の友好的な交流を盛んにすると期待される。結果として、エスニック・ツーリズムの活性化は異文化理解およびエスニック間の緊張緩和に貢献し、長期的には多文化社会の安定化につながると思われる。

2. 論文構成

本論の構成は以下のとおりである。第1部は本論を進める上で有意義であると思われる理論や定義付けを先行研究から導き出した基礎研究である。第2部と第3部はオーストラリア社会のなかでエスニック・ツーリズムが形成される諸要因を発展段階に分け、一連のテーマに沿って研究したものである。第2部では研究のフィールドであるオーストラリアにおける多文化社会の形成過程やその特徴について述べた。第3部は前の部で挙げた多文化社会における様々な文化所産のうち、観光や余暇活動に焦点を当てた。第4部と第5部はオーストラリアにおける人文観光のうち、エスニック文化を特徴的に用いているいくつかの事例を研究したものである。第4部は移民観光、第5部は先住民観光に関する事例が中心である。結語は本論を総括し、オーストラリアにおけるエスニック・ツーリズムの独自性と、エスニシティ研究として本論が結論づけたものの普遍性との両面を導き出したものである。各章の概要は以下のようになっている。

第1部「エスニック・ツーリズムに関する研究アプローチ」のうち、第1章では、エスニシティや多文化主義に関する先行研究を基に、その理論や定義を整理した。エスニシティに関する概念は、旧大陸と新大陸、先進国と発展途上国、あるいは東洋と西洋など、地域によって異なっており、全世界的に共通した定義は著者の知っている限り見られない。そこで、この章では誤解を避けるため、オーストラリアにおけるエスニシティとは何であるか本論なりの定義付けを行った。

第2章では観光に関連する用語の定義をまとめた。観光の形態は時代によって変化し、少なからぬ研究者がそれをテーマにしてきた。そのため、この章では欧米諸国や日本などにおける観光研究の誕生とその変遷についてまとめた。古典的な観光の定義では、観光客は仕事以外の理由で場所を移動する人であるというように、空間的な移動の広範囲にわたるプロセスの一要素として考えられていた。しかし、現代社会では観光がレジャー活動の一貫としても考えられるようになったため、観光客は一時的な余暇による変化の経験を目的として、家から離れた場所を自発的に訪れる人であると認識されるようになった。

第3章は観光研究のうち、エスニシティに関連する先行研究をまとめたもの

である。観光は経済学や地理学など多様なディシプリンの主題になっている。エスニシティ研究もまた、政治学や歴史学などの研究テーマとなっている。そこで、複数の要素から構成されるエスニック・ツーリズムの研究ではマルチディシプリナリー研究やインターディシプリナリー研究が用いられるようになった。特に、後者の研究はより厳密な調査方法が要求されるため、サンプルや指標、研究地域などを同一化したうえで、複数のディシプリンの研究者により調査する必要性が生じる。これらの方法は、単独のディシプリン研究よりもより総合的に研究できるということで、今後の観光研究を発展させるうえで期待されている。

第2部「オーストラリアにおけるエスニック形態の変遷」はエスニック・ツーリズム形成の前段階を対象としている。エスニシティ研究としての本論を始める動機となったものは、多民族社会の調和はいかにして保たれるのかという素朴な疑問であった。その疑問を解明するためのモデルケースとして、ここでは民族間の関係がかなり友好的に保たれているオーストラリアの多文化社会を用いた。第1章では多文化社会の形成史について第二次世界大戦後を中心に、第2章では現代における多文化社会の多様性について述べた。第3章と第4章ではオーストラリアにおける観光に関連した文化所産の諸事例に注目した。

多民族社会において好意的なエスニック関係を築くのには、移民や先住民が友好的な態度を保つだけでなく、ホスト社会側も友好的な態度をとらなければならない。そのためにはエスニック間の交流による相互理解が大切であり、異文化理解教育などによって両者が異文化受容の寛容性を高めることが重要である。逆に、民族問題は異文化受容のメカニズムがうまく働かなかった時に起こると考えられる。

そのため、エスニック問題を研究する時は移民や外国人労働者の分析だけでなく、それと同時に異文化の受容側の分析も行わなければならない。多民族社会におけるマイノリティ問題はマイノリティ側だけに原因があるのではない。そして、エスニック問題の改善には被害者になりやすいマイノリティのみならず、加害者になりやすいマジョリティ側をも含めた対処が必要である。さらに、エスニック問題の解明には、エスニック文化のみならず、生産基盤を含めた広い範囲で考察しなければならない。オーストラリアでしばしばスローガンとして叫ばれているような民族の「共生」(living together)という花を咲かすためには、経済や教育など、それを支える根に当たる部分から育成しなければならない。

第3部「オーストラリアにおける観光形態の変遷」はエスニック・ツーリズムの形成段階を対象とし、オーストラリアにおける観光形態やその先行研究について、人文的な観光の歴史的変遷を中心にまとめたものである。第1章では

観光・レクリエーション省が設立された 1970 年代まで、第 2 章では観光省が設立された 1990 年代初頭まで、第 3 章では観光政策がピークを迎えたキーティング政権以降の政策についてまとめた。第 4 章では、将来オーストラリア観光を担う人材育成について述べた。

社会が多様化し、複雑になると、観光の形態やその研究対象もまた多様化していった。さらに、観光の研究をする人々が増加するのに伴い、観光の概念自体が様々な解釈をされている。そのため、ここでは狭義の解釈である周遊型の観光に加え、長期滞在型のリゾート・ライフやイベントに伴う日帰り旅行なども研究対象とした。つまり、人間の移動を伴うレジャー活動の総体を研究対象としたが、限られた紙面で観光に関連した余暇活動をすべて扱うのは困難であるため、ここでは異文化交流に関連する旅行や人文的な観光を中心に述べた。観光による人間の移動は文化伝播の機会や異なった文化の遭遇の場を与える。それによって文化的なショックや文化間の衝突が起こり、文化変容の要因となりうる。

現代の観光形態を見ると、環境保護運動の高揚は自然に優しいエコツーリズムを広めていった。都市で生計を立てている者がグリーン・ツーリズムやファーム・ステイを通して、日常を離れた農村の生活を体験する余暇形態も見られる。これらの観光には、自然と共に暮らす先住民の文化や農業生活者の生活習慣など、様々な要素が付加され、新たな形態が続々と生まれつつある。観光は人的な移動を伴うのと同時に異なった地域で生活する人々の接触を伴う。特に海外旅行は現象そのものが異文化接触といって過言ではない。アボリジナル・ツーリズムでは、より異なった文化を目指し、文明社会を離れて旅する人々も見られる。

第 4 部「オーストラリアにおける移民観光の形成と多様化」はオーストラリア各地で行ったフィールドワークや資料収集を基にした事例研究である。具体的な例として、多文化社会における食文化の変容プロセスを元に移民文化の普及化について考察した。オーストラリアにはアボリジニやイギリス系移民のみならず、世界各地から移住してきた実に様々な人々が住んでいる。この多文化社会におけるエスニック文化の多様性のため、オーストラリア各地に興味深い観光地が形成されている。

この部の第 1 章ではオーストラリア全体、第 2 章ではメルボルンにおける移民がもたらしたエスニック料理を中心に述べ、第 3 章で普遍的な模式化を試みた。オーストラリアの料理といえば、ミートパイやフィッシュ&チップス、野菜ペーストのベジマイトなどを思い浮かべる方もおられるだろうが、世界各国から移民を受け入れている同国では地中海料理や東南アジア料理も堪能できる。特に、外食産業における中国系移民の進出が極めて活発であるため、オースト

ラリア各地の主要都市には中華料理の一大レストラン街が形成されている。

第5部「オーストラリアにおけるアボリジニ観光の複合化」では、オーストラリアにおけるエスニック観光のうち先住民文化について注目した。第1章では自然のなかで培われたアボリジニ観光の概観、第2章では体験型アボリジニ観光の具体例、第3章ではシドニー・オリンピックにおける先住民の役割について、それぞれ事例を中心に述べた。第4章ではアボリジニ観光が複合化するプロセスについて考察した。カカドゥ国立公園やエアーズ・ロックなど、大陸北部や内陸部には雄大な自然のなかで育まれた先住民文化に触れることができる。これらの地域では、先住民の独特な壁画や伝統的な狩猟採集生活を体験するツアーが組まれており、文化志向と自然志向の両者から成る少なからぬ観光客が海外から訪れている。

結語「多文化社会におけるエスニック・ツーリズムの形成過程とその要因」は、各部で導き出された研究結果を総括したものである。本論では、複雑な多文化社会のエスニック関係を簡潔に解明するために、観光形態や芸術作品、外食産業といった日常的に接することができる文化所産を研究の媒体とした。しかし、それでもなおオーストラリアにおけるエスニック関係は単純ではなく、これらの対象をすべて解明することは困難であろう。

しかしながら、あくまでも実験的な仮説ではあるが、結語では文化変容プロセスのモデルを導き出した。オーストラリアのように安定した多文化社会を形成するのには、外部からの異文化の伝播だけでは異文化の受容や文化変容を起こすのには不十分である。それどころか、受け入れ態勢が整っていない状態での無秩序な異文化の流入は文化摩擦の原因にもなりかねない。多文化社会の整備は、異文化交流の視点から見ると、移民の受け入れに対して有効だけでなく、海外からの観光客を受け入れる体制を整備するうえでもまた有効であると考えられる。

3. 総括

本論ではオーストラリアにおける史的変遷と現代の事例から、エスニック・ツーリズムの形成過程とその要因について述べた。ここでは、移民や先住民といったエスニック・マイノリティのみならず、アングロ・アイリッシュ系のマジョリティであるホスト社会や実際に観光地を訪問する海外からの人々など、様々な方面からアプローチを試みた。上記のように、第1部で諸外国とオーストラリアとの社会背景の比較、第2部で多文化社会における人文観光の位置づけ、第3部で観光政策史を述べた後、第4部と第5部で事例研究を行った。第4部では、先述のように、エスニック料理の事例を基にしてエスニック文化の普及過程についてまとめた。外来のエスニック文化が広く社会に定着するた

めには、移民による異文化接触のみならず、ホスト社会側の異文化への寛容性や、文化所産の変容を持続させるための生産基盤の変化などが必要になってくる。

第5部ではアボリジナル・ツーリズムの事例を基にして、エスニック・ツーリズムの発展段階を移民増加に伴う民族文化の多様化、観光産業とエスニシティの融合、エスニック・ツーリズムとエコツーリズムの複合化の諸段階に分けた。人的資源を活用するエスニック・ツーリズムでは、観光の持続可能性が期待され、結果として長期的な観光の発展をもたらす可能性がある。かつての大規模リゾートは一時的には観光客の誘致に有効であったが、開発に伴う環境破壊はオーストラリア観光の目玉である自然を台無しにするという欠点があった。しかも、同国の地理的な隔離性と高い交通費を考えると、他国と同様の開発をしていたのでは観光地としての魅力が相対的に欠けるため、誘客競争を進めるうえで不利である。他方、先住民のアボリジニはオーストラリア独自の存在であり、また、諸民族が平和に共生している多文化社会は世界的に貴重な存在である。そのため、自然環境を破壊せず、オーストラリアの独自性を生かせるエスニック・ツーリズムは隙間市場をねらった賢い選択の1つといえる。

本論で考察したエスニック・ツーリズムの利点を総括すると、経済面、社会面、政治面など、様々な分野からの貢献が期待されることがわかる。本論はオーストラリアをフィールドとして研究を行っているが、ここから同国の地域的特徴を明らかにすると同時に、多文化社会やエスニック・ツーリズムにおいて普遍的に導き出せる社会的要因や歴史的プロセスの抽出も可能であろう。なかでも、アボリジナル・ツーリズムによる伝統文化と環境保護運動の融合はオーストラリアだけではなく、他の先進諸国や一部の発展途上国においても広まりうる現象である。

本論は観光形態や芸術作品、食文化といった文化所産を対象としており、無形である文化そのものを研究したわけではない。しかし、文化によって作り出された文化所産は文化を映し出した鏡のようなものである。オーストラリアにおける移民の食文化の受容がホスト社会の産業構造の影響を強く受けていたように、文化の創造や持続には人間の生産活動が密接に関係している。したがって、本論で導き出したメカニズムは、物質的な文化所産の伝播の分析だけでなく、文化所産を形成するプログラムにあたる文化そのものの伝播の研究にも有効なのではなかろうか。

本論では多文化主義が比較的順調に受け入れられてきたオーストラリアの事例を研究対象とし、しかも、多文化社会のポジティブな面にスポットライトを当ててきた。さらに、多文化社会のなかで主流になりつつあるコマーシャル型のレストランや観光産業に携わるのは、経営者であるビジネス移民や高度な調

理人である技術者移民であり、いわゆる豊かな移民や特殊技能を持った長期滞在者を中心に論を進めてきた。つまり、本研究では民族紛争地域や貧困にあえぐ貧しい移民など、深刻な社会問題の原因究明をしたわけではなく、多様な民族によって構成された社会の負の要因を追及したわけではない。そのため、民族問題という患部を取り去るような外科手術的な方法は、ここから導き出すのは困難であろう。

しかし、社会の患部を切り取るのも大切だが、社会を健全な状態に保つのも同様に重要なことである。多文化政策導入後のオーストラリアは、とにかく困難であるといわれる諸民族の共生を良好な状態で保ってきた貴重な例である。しかも、白豪主義という負の遺産を抱えた国家がこのような偉業を成し遂げたという点で、世界でも稀な例だといえよう。エスニック関係の改善は異なった文化背景の観光客を受け入れる上で重要な基盤作りになったと思われる。本論はいわば多民族共存への1つの解答としてオーストラリアの多文化社会を研究したわけであり、この解答は国際化に伴って今後ますます盛んになると思われる異文化間の摩擦を減らすためのモデルケースの1つに成りうるだろう。

さらに、アボリジナル・ツーリズムに見られるように、オーストラリアでの事例は異文化間の共生のみならず、自然と人間とのより良い関係も示唆している。しかもヨーロッパ諸国と比べると後発の観光地であったオーストラリアでこの偉業が達成されたのは興味深い。1980年代にクイーンズランド州で行われた大規模なリゾート開発のように、かつてのオーストラリア観光は、自然破壊を伴う場合があった。しかし、90年代における同国の観光はコンサベーション型に様変わりし、サステイナブル・ツーリズムのコンセプトはシドニー・オリンピックのなかにも生かされた。

おりしも日本でもバブル期に行われた大規模リゾート開発への反省から、エコツーリズムやグリーン・ツーリズムなどの環境に優しい観光形態に対する注目が高まっている。日本では観光を活用した地域社会の活性化が叫ばれて久しいが、この有効な解決策は簡単に出せないようである。さらに、日本における観光客出入数のアンバランスは1970年代のオーストラリアより著しく、不均衡の是正は一向に改善されない。本論はあくまでもオーストラリアという一地域の研究であるが、南半球にある後発観光立国の経験は優良なモデルケースとして注目するに値するだろう。